九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

資料と公共性 : 2019年度研究成果年次報告書

岡崎, 敦
九州大学大学院人文科学研究院：教授

藤川, 隆男
大阪大学大学院人文科学研究科：教授

市澤, 哲
神戸大学大学院人文科学研究科：教授

松田, 陽
東京大学大学院人文社会系研究科：准教授

他

https://doi.org/10.15017/2557155

出版情報：2020-03-06. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン：
権利関係：

21 世紀の歴史学とパブリック
−IMBY/【インターネット・アニメ・モノ・アート・デジタル】・ヒストリー

藤川隆男

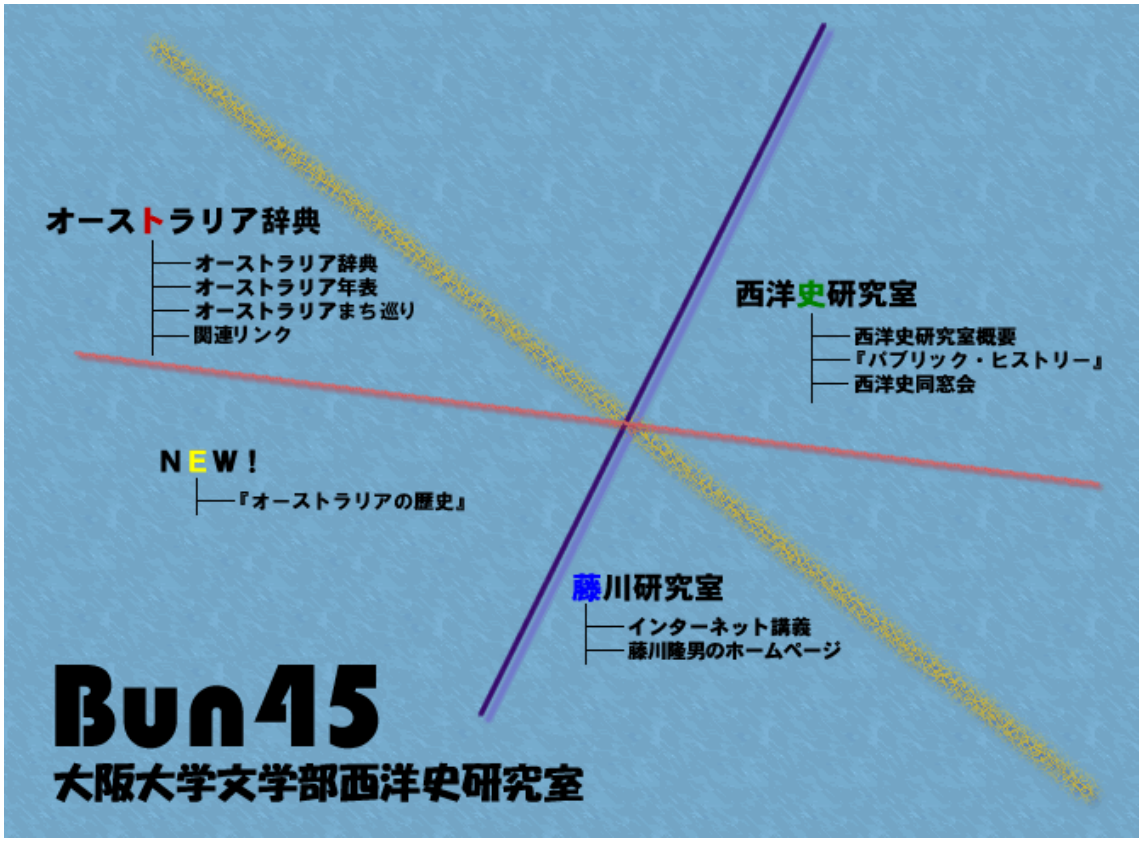
はじめに

本報告のテーマ、「21 世紀の歴史学とパブリック（the public）」におけるパブリックとは、アカデミアの外の世界、つまり大学の歴史学研究とは独立して存在する、多少なりとも歴史的なものに関心を抱く人びとや団体、分野の集合体である。私にとっては、私自身の研究対象や領域、研究の質とは独立した問題として、しかも、学生を教育するという点（ほとんどの学生はアカデミアに行きはしない）からは、どうしても避けられない課題として、歴史学とパブリックの関係があった。学生をどのように育てて、社会に送り出すか。社会にある歴史的なもの、歴史意識と自分の研究はどういう関係にあるべきか。社会的な課題、経済社会に効率的に対応できる人間を生むということではなく（ただし、そういう教育をあれかこれかで否定するつもりはない。）、人としての尊厳を個々人に対して尊重するような社会を生み出すのにどのように貢献できるのか、そのような問題意識の下にいろいろな活動を行ってきた。歴史学とパブリックの関係をどのように考え、どうそれに関わってきたのか。IMBY において、つまり In my back yard に関して、時代を追いながら、インターネット、出版、アニメ、博物館、アート、デジタル化と歴史との関係を順に整理する。

１．文理遊合：インターネット

1999 年に大阪大学の西洋史研究室のホームページを作り始めた。図―1 は 5 年後のものだが、完成した 2000 年と異なるところは、関連リンクと NEW の部分がないこと、『パブリック・ヒストリー』が『西洋史学』、オーストラリアまち巡りがオーストラリア写真館だったことくらいだと思う（Internet Archive では 2000 年までのものが確認できる）。「研究室の」サイトというよりも、自分のサイトに研究室を付け足しただけなので、私が当時しようとしていたことが、ここから大まかにわかると思う。

Bun45 というのは、文 45 講義室のことを指す。大阪大学文学部の建物には、教室は現実には文 42 までしかなかったので、インターネット上に新たな教室を構築するという意味をこれに込めた。当時、縦線と横線を描き、文字による説明と組み合わせるとか、画像を入れることは容易であったが、斜めの線を引くことができなかったので、阪大のコンピュータクラブに属した三銃士の一人、石井聡さん（理学部の学生）がデザインを担当し、ドットをキーボードで打って斜線を作成してくれた。ある意味、**過剰で不必要な遊び**でできている、ものすごくアナログなトップページである。



図－1　2004 年改修直前の大阪大学西洋史研究室のホームページ

文 45 講義室なので、当然ながら授業を行わなくてはならないので、1999 年に研究科初のインターネット講義 [1]を開始する。講義はすべて書下ろしで、今はなき YAMAHA SoundVQ を使って 8 トピック 10 回の講義を配信した。

三銃士の他の二人も紹介する必要があろう。二人目の西洋史の葛西修二さんには、ホームページ全体の統括と運営を任せた。最後の三銃士には、最も重要な役割、オーストラリア辞典とオーストラリア年表 [2]というデータベースの構築を担当してもらった。その人物とは、後に情報工学研究科に進み、現在は奈良先端科学技術大学院大学の准教授となった石尾隆さんである。

インターネット授業やオーストラリア辞典・辞書を当時どう考えていたか。2000 年 11 月 2 日に作成した文書があるので、それを見ると次のように記されている。

(1) 学生は、イントラネットを通じて配信される約 10 のオーストラリア史の授業（音声）を受講し [3]、その授業にふさわしいホームページを作成する。…

(2) 学生は、ネット上のオーストラリア辞書や年表を利用しつつ、教員の指導の下に多くの資料を集め、経済、スポーツ、文化など関心のある新しい辞書の項目を執筆する。…学生は、自身の執筆した項目を他のウェブサイトと結ぶリンクを作ることで、情報の配信についての理解を深める。

(3) 学生は、ネット上のオーストラリア史年表を参照し、関心のある項目について、マイクロ化された約 200 年間のオーストラリアの過去の新聞や政府文書などから史料を探し、それを翻訳し、年表の参考文献として付加し、ネット上で利用できるようにする。…

(4) 学生は、ネット上に流れるオーストラリアのラジオ放送を聞き、それを翻訳し、年表の最新項目や史料として加える。…

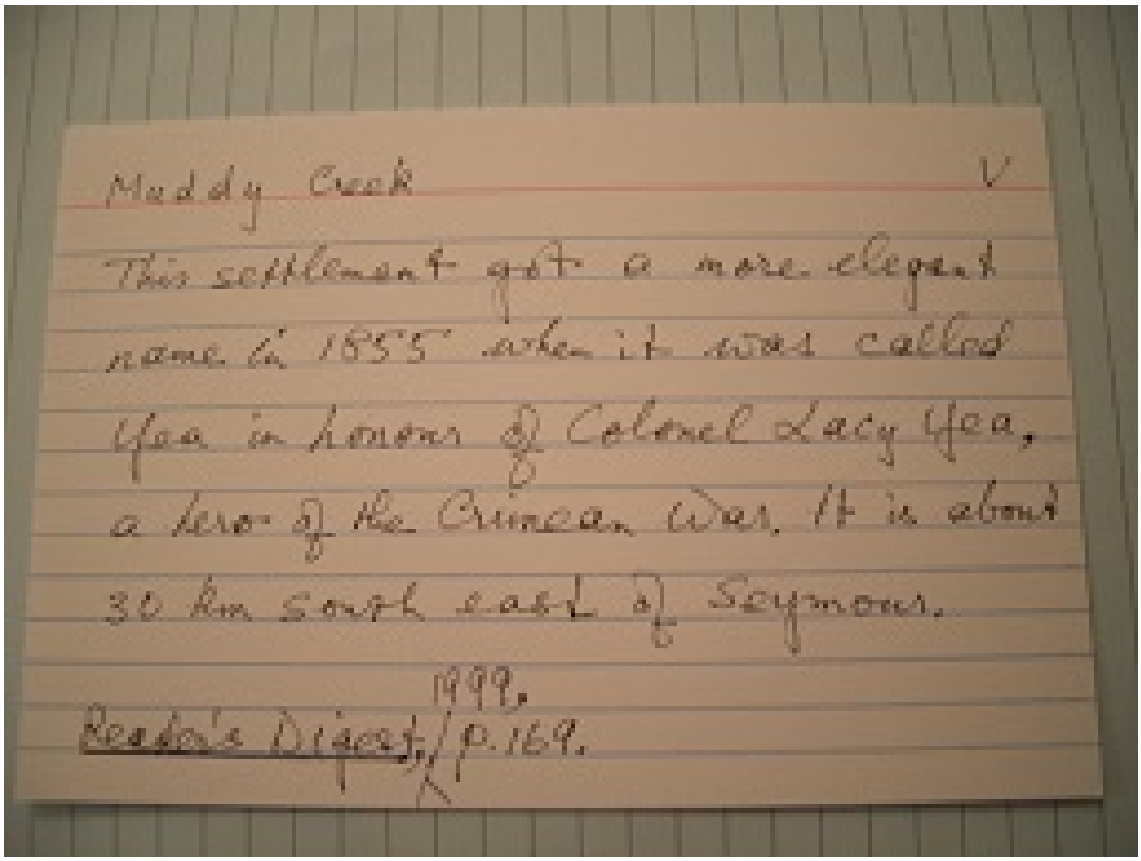
(5) 学生は、画像ライブラリーを作成し、自身の辞書や年表・史料の項目と連動させる。…

当時、広く社会的に有用な知識を持続的に提供できるようなデータベースを構築することを重視しており、勉学・研究が社会的に有用であることを学生に自覚させ、授業に主体的に参加するインセンティヴを与えるだけではなく、人文系の高等教育機関の社会的なプレゼンスを高める効果も狙っていた。しかも、言語、音声、画像を多面的に組み合わせ、常に新たな教育法の開発につなげることを考えており、オーストラリア史を対象とし、インターネット上に存在する、歴史辞書、年表、史料集、画像ライブラリーの利用・作成を基本とする授業を構想していた。

辞典・年表のデータベースソフトの方は、石尾さんが優秀であったおかげで、「こんなんほしい。」「ここらをこうちょっと変えてほしい。」とか言っていると、手間いらずにできあがったが、問題は中身であった。2000 年度からの 4 年間、毎年だいたい 20 人余りの学部生と大学院生とともに、演習の時間を利用して辞典と年表の項目を書き上げた。400 字の原稿用紙にすれば 4000 枚くらいにはなる量の原稿を何度も校正して、仕上げた。

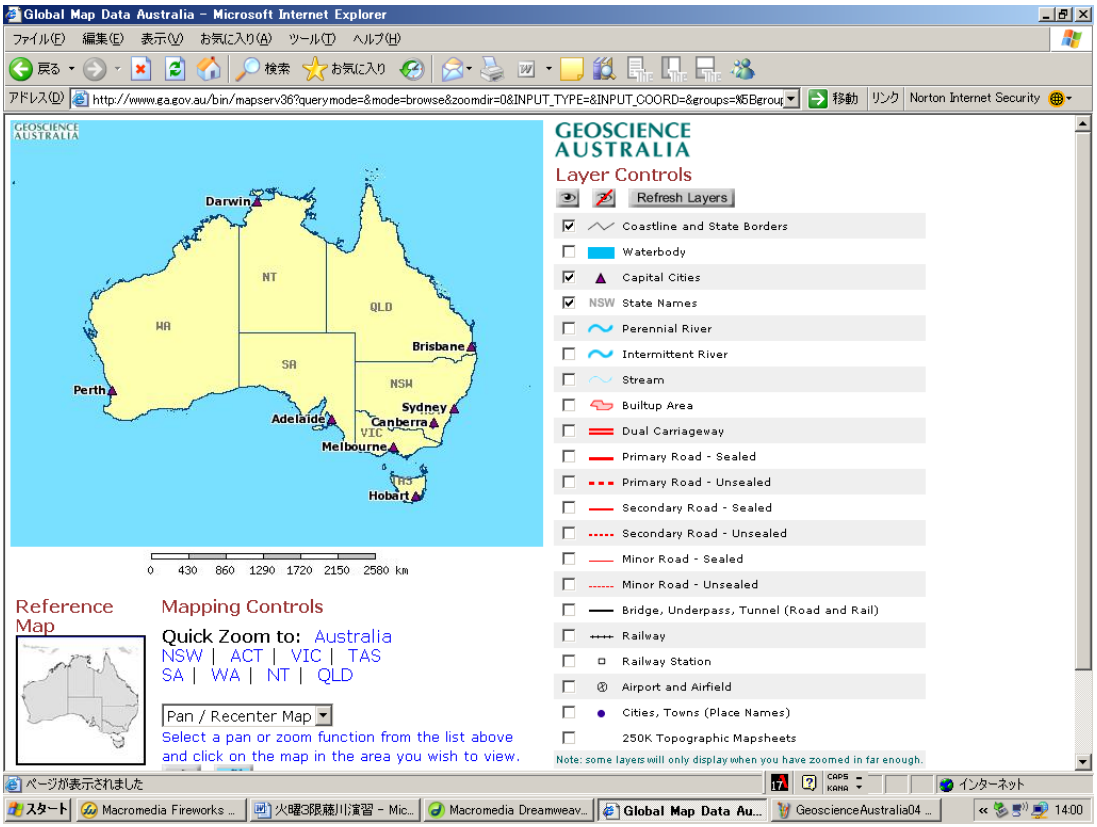
続いて、2004 年度には Net Kelly[4]というオーストラリアの町を紹介するサイトを立ち上げた。Google の Street View がなかった時代なので、いろいろな町を紹介するページを写真入りで演習の学生さんたちに作ってもらった。クィーンズランド州とニューサウスウェールズ州で終わりになったが、Maryborough などはおもしろいと思うので見てほしい[5]。

2005 年から 2007 年にかけては the Ghostly Gazetteer of Australia[6]という、オーストラリアの失われた地名を地図上で検索できる英語のサイトを構築する。最初に、私の先生であった故 D.W.A. Baker が作った、失われた地名の手書きのカード約 2600 枚の内容を、エクセルのスプレッドシートにすべて書き写して、デジタルデータ化した。図―２がカードの一例である。



図―２　D.W.A. Baker の手書きのカード

次にこれを Geoscience Australia からダウンロードした地図上に配置した。FireWorks を利用して、オーストラリアの失われた地名に近似する位置にある都市を書き入れて、その都市をクリックすると失われた地名が現れるようにした。図―３は Geoscience Australia からダウンロードする様子を示したものである。現在では GIS が発達し、データの地図的表現が簡単にできるようになったが、当時はそういうシステムが利用できなかったので、ずいぶん手間のかかる作業になった。FireWorks の利用については、ダルタニアン、当時大学院生で、現在は清風高校教員の米田誠さんが力になってくれた。地図を用いたデータベースの公開も、ネットで検索可能な本格的な歴史辞典や年表の公開も、日本の最先端を進んでいたように思う。



図―３　Geoscience Australia　のサイトからダウンロードする様子。

２．パブリックとの交差：『パブリック・ヒストリー』

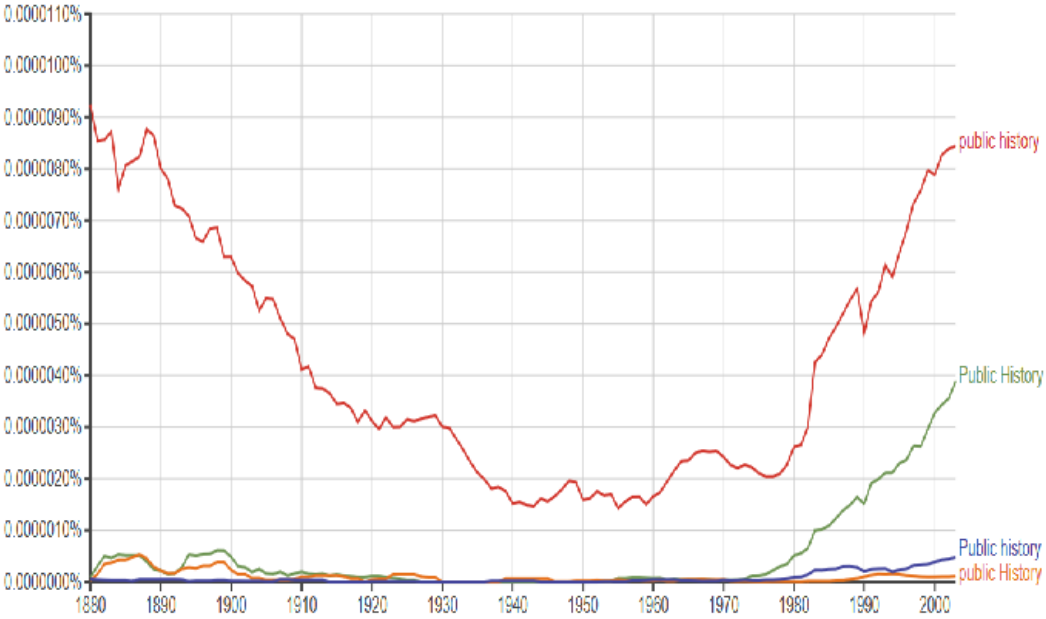
もう一つ取り組んでいた課題は、雑誌『パブリック・ヒストリー』の創刊である。2003年に当時岩波書店などで導入が始まっていた編集ソフト InDesign を用いた DTP による新しい雑誌を立ち上げることを考えた。インターネットと結合し、西洋史の枠組みを超えるだけでなく、実践的にも、研究内容でも、社会（the public）といっそう結びついた雑誌を目指した。また、InDesign 導入には、もう一人のダルタニアン、現在は弘前大学准教授で当時大学院生であった中村武司さんが力になってくれた。

2003 年 4 月の第 1 回の立ち上げの会合では、従来の歴史系の研究雑誌との差別化をはかることを目指しており、歴史の行方を考える大テーマ、社会情勢や学術に関連するホットなテーマを取り上げることを考えていた。例えば、社会人女性ドクターの特集、イギリス帝国と世界システム特集、白人と白人性などが例として挙がっている。また、新しいソフトや歴史関係のサイト、情報技術の手軽な利用法を紹介や、パブリック概念、市民との対話、国ではない「公」領域を求めるような内容も提案された。

『パブリック・ヒストリー』の創刊はこうして軌道に乗ったが、ある教授が「ゼフィルス」（西風の神）を雑誌名にしたいと提案してきた。当時の助教が民主的に投票をするということでスタッフと大学院生の投票を行い、正式にパブリック・ヒストリーの名称が採用された。もちろん、その後、大学に目の恵みの西風は一度も吹くことなく、現在に至って

いる。当時、日本にはいまだにパブリック・ヒストリーという概念は流布しておらず、パブリック・ヒストリーとは何かについても説明できる人間はいなかった[7]。しかし、グローバルに展開する社会情勢を見る限り、パブリック・ヒストリーの拡大は必然だとも思っていた。当時はこの判断の根拠を実証的に示すのは難しかったが、今は Google Ngram Viewer がある。

グラフ―1 は、Google Ngram Viewer を用いて、public history という語の出現頻度を調べたものである。1980 年頃から、雑誌『パブリック・ヒストリー』の創刊までの時代に、英語圏で急激に関心が高まっていたことが分かると思う。面白いことは、19 世紀にも public history はよく使われていたが、それが使われなくなり、20 世紀の第 4 四半期に復活した点である。おそらく違う意味の言葉として復活しただろうことも、グラフ―1 からは推測できる。第 2 次世界大戦前にはほとんどなかった、大文字の Public History が、近年では用例の約半数を占めるようになった。第 2 次世界大戦前には、英語の一般的な用法に従い private に対立する形で public が用いられてきたが、academic と対照的な意味で使われるようになっている[8]。

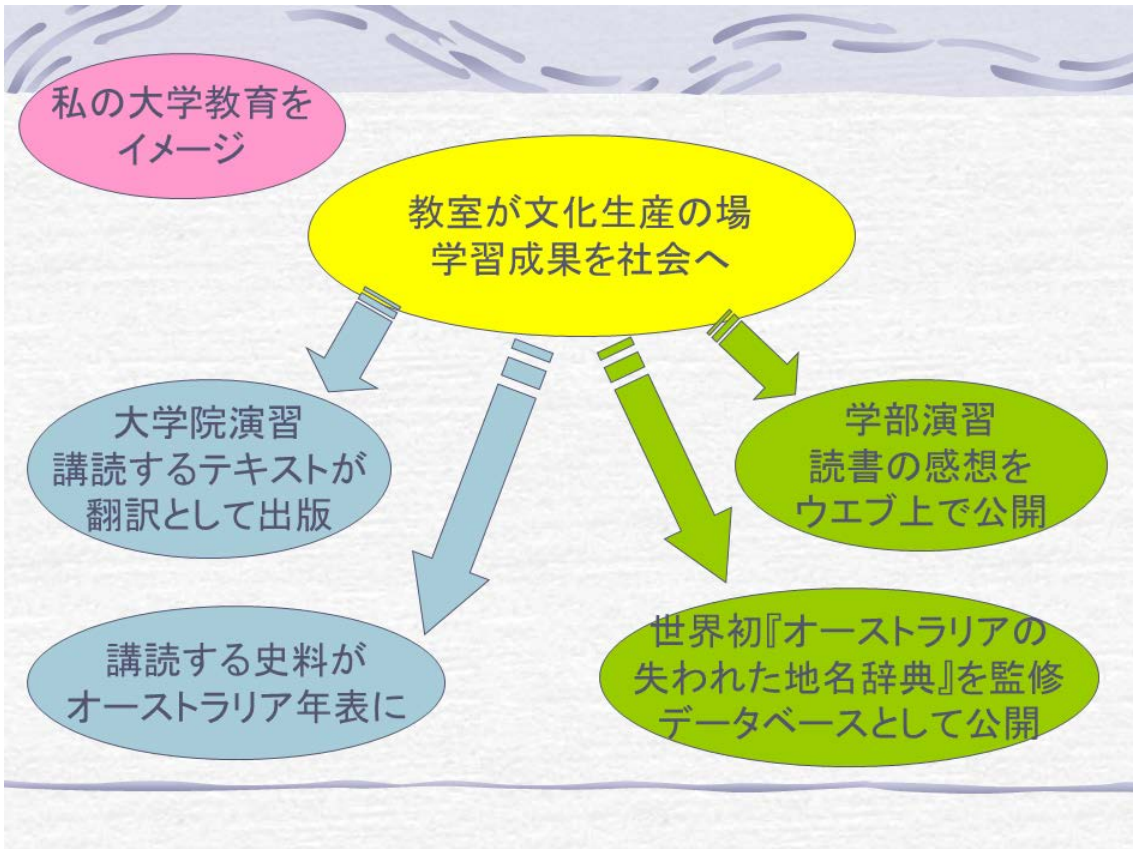


グラフ―1　public history の出現頻度（Google Ngram Viewer より）

3．社会への発信：アニメで読む世界史

動かない大学と迷走する西洋史研究室に少し嫌気がさした時、鴨が葱を背負って来たと言うと失礼だが、スイス史を専攻する大学院生、現在は関西大学准教授の森本慶太さんと、帰宅する阪急電車で一緒になった。研究テーマにちょっと難癖をつけておいて（フリ）、「スイスと聞いたら何を連想する。それはハイジやろ。アルプスの少女ハイジの歴史に決まりやな」と新たなテーマを押し付けてみた。そこから話が広がり、「アルプスの少女ハイジ」プロジェクト、通称ハイプロが始まった。それは、世界名作劇場と呼ばれるアニメ群を対象とする『アニメで読む世界史』（山川出版社、2011 年）へと発展していった。

この活動は、実は大学教育に関して私が抱いていた理想を実現する部品、モジュールの１つである。大学の授業に対する私の考え方を説明する、当時のパワーポイントのスライド、図―４を見てほしい。ここに示したような構想を、私はおおむね西洋史の授業で実施してきた。失われた地名辞典 the Ghostly Gazetteer of Australia についてはすでに説明した。年表についても説明したが、補足する必要がある。年表にはそれぞれの事項に関して、関連する史料を付加できるリンク機能が付いており、授業で英語史料を翻訳し、これを年表で公開できるようになっている。これを 1 年間授業で行った。講読するテキストの翻訳。これは私の師、川北稔が実践し、私が身近に経験してきたことでもある。ピーター・ラスレットの『われら失いし世界』は[9]、学部と大学院の合同演習で読んだテキストを、大学院生と師が共同で翻訳したものである。翻訳が出版されたときには、参加した学生としては誇らしくもあり、翻訳した大学院生にとっては厳しい訓練となり、しかも業績にもなる。ただし、教員にとっては大変な労力が必要で、単独で翻訳したほうが楽だというのは自信をもって言える。私は 2005 年から大学院生とジョン・トーピー『パスポートの発明』を講読し[10]、それを 2008 年に無事翻訳出版することになるが、師の苦労が身に沁みてわかった。この時の標語は、「表現するために作り、表現することで作る。」だった。学部の演習については、読書の感想ではなく、2006 年に英米圏の歴史（ディベート演習）Performing Histories in English を新たな授業として開始し、英語での報告をまとめて、ネットで公開するということを始めた[11]。



図―４　西洋史の演習からの社会への発信を示したスライド（2005 年）

アニメの作業を始めたのは、もう少し後になるので、図―４には現れないが、教室が文化生産の場であり、成果を社会に還元するという同じ発想で始めた。いわば５つ目の吹き出しである。１章の枚数、アニメの紹介の仕方、歴史的説明の内容の割り振りなどの枠組みを執筆者に提示し、統一的なテーマを明示し、選択したアニメにできるだけ関係の深い大学院生を選び、執筆の意向を確認した。さらに、論考を編者と執筆者が相互批判しながらブラッシュアップする手はずを整えて、同時に出版してくれそうな出版社と交渉に入った。出版社はすぐに決まるものだと思ったが、今になって考えると２社目で決まったのは幸運だった。軽そうな本ではあるが、作っていくプロセスに必要な労力はこれも膨大だった。1 つ自慢できることは、女性の執筆者の多さである。章の担当がない監修者の私を除く、執筆者９人のうち５人が女性であった。ところが、『アニメで読む世界史２』（山川出版社、2015 年）では、2 人しか女性に参加してもらえなかった。東洋史と日本史からは女性の執筆者を得られなかったのが 1 つの原因である。2 回目の出版のきっかけとなった高大連携のための大阪大学歴史教育研究会も真っ黒な、男性優位な黒社会なので、この状況はかなりまずいと感じている。

アニメを素材とした歴史叙述を生み出すことは、歴史をアニメ化するという直接的なアニメの利用とは異なる次元で、大衆的なアニメ文化と学問的な歴史研究を接続する試みである。アニメの背景となった歴史、アニメの歴史的解釈を通じて、既存のアニメ文化と歴史研究を少しでも架橋したいと思った。歴史とパブリックを繋ぐ多くのチャンネルの１つと思えば、こうした試みも悪くはなかろう。

この２冊のアニメで読む世界史に関して、最大の不満はイラストであった。原作の絵が使えないこと、それに代わるイラストも今一つで、売れ行きに大きく影響したと思われるし、モノとしての本へのこだわりという点でも、もやもや感が残った。

４．歴史博物館：社会のなかのパブリック・ヒストリー

歴史博物館への関心は、オーストラリアの歴史戦争を契機に始まるが [12]、博物館もパブリック・ヒストリーの主要な舞台である。ベネディクト・アンダーソンやエリック・ホブズボームを持ち出すまでもなく、伝統が発明され、共同体が想像される場、公的記憶とナショナル・アイデンティティの表明の場としての博物館の機能は、多くの人びとによって指摘され、博物館を巡る紛争はしばしば取り上げられてきた。公的な記憶、公的な歴史もまた、パブリック・ヒストリーと呼ばれる。それを研究の対象とするに当たって、オーストラリアの歴史博物館に注目した。

他方で、20 代からほぼ毎年、キャンベラにある国立図書館に通っていると、その変化を否が応でも感じざるをえなかった。50 年代末から始まった、自分の家系と家族の歴史を熱心に調べる家族史が、年を追うごとに拡大していた。世紀転換期になると、図書館の利用サーヴィスは、ますますこうした人びとを対象にするようになり、プロの歴史家の居心地は悪くなった。歴史を調べている人間の中で、大学の研究者は一握りの集団に過ぎなくなった [13]。

州立博物館や国立博物館も研究対象の一部ではある。しかし、上記のような個人の歴史

意識の覚醒に支えられた、もっと民衆の歴史意識に密着した場としての地方の歴史博物館に私は着目した。1950 年代末まで、オーストラリアの博物館の数は百を超えない程度であったが、博物館に関するオーストラリア最大の調査報告書『ピゴット報告書』が出版された 1975 年には、その数は千を超えるようになった。そのほとんどが地方の小さな歴史博物館であった。報告書は次のように述べている。「過去 15 年間、オーストラリア史への関心が高まった結果、何百もの小さな博物館が設立された。これは主として、草の根の運動、今世紀のオーストラリアにおける最も活発で予想外の文化運動の一つである。」[14]その後もこうした小さな博物館の数は増加し、おそらく今では 2000 館以上あると思われる。

アカデミックな歴史家や研究者は、こうした博物館を啓蒙主義的あるいは近代主義的な観点から見下してきた [15]。その展示内容は、開拓物語で、エスニック集団や先住民の物語は排除されており、白人男性のプロテスタントの中産階級的、アングロ・ケルト系中年の観点が支配している。さらに、その展示の仕方も無秩序で、「博物館というよりは驚異の部屋のように見える奇妙な記憶の宮殿」だとされ、「現代の博物館学者にとっては嫌悪の対象である。明確なテーマはなく、手書きの説明は素人じみており、時代やコンテクストや解釈にほとんど何の関心も払われていない。」と評価されてきた [16]。この評価は正しいのだろうかという疑問と、草の根の歴史意識への関心がこの研究を始めた動機である。

2010 年に本格的調査を開始し、6 州 2 準州のすべてを廻り、様々な歴史博物館を訪れ、展示品を実際に確認できたところだけでも 160 以上になり、今日に至っている。2018 年 2 月のタスマニア訪問で一通りの調査が終わった時点で、手元には 2 万 5000 枚くらいの写真が残った。これを関連する写真ごとに 169 のフォルダーに保存し、その確認を行っているが、ようやく 93 個目のフォルダーに達したところである。このような大量のデータは、デジタル・ヒストリーの格好の素材でもあり、それを利用して公開していこうと思うが、歴史家としては、現地を自分の眼で見て、1 つ 1 つの施設を歩き、体で感じ、膨大な文字データも含めて撮影した内容を再び自分の眼で確認して、ようやく自信を持って、何かを言えるような気がする。ただし何を言うかについては変幻自在でありたい。

５．アートな歴史：コレクター？

2013 年、博物館を廻っていた時だ。ヴィクトリア州の内陸の町を廻り、メルボルンの西方に広がる山地を抜けて、かつて羊毛の集散地として栄えた港町ジロングに入った。ここには定点観測的に何度も訪れている羊毛博物館がある。この博物館の地下で地域の子供たちが描いたバニヤップ画の展示が行われていた。この展覧会は、1845 年にバニヤップを最初に報道したのがジロングの新聞だったという経緯から、開催されたものであった。展覧会が、これまで研究してきたオーストラリアの先住民と白人入植者の関係を、バニヤップを通じて描きだすという契機になった。

同年の秋、若手の日本画家さんの絵を購入しようと思いたった。関西、とりわけ大阪の文化力の低下は著しく、こうした裾野の衰退が広い意味での学問の力、学問的想像力の低下を招いているように感じた。考えるよりも行動と、生まれて初めてギャラリーに入り、服部しほりさんの作品を購入した。それがコレクターと呼ばれる（本人は否定）道に進む

きっかけになった。

私たちは、研究成果をデジタル化し、発表するという時代に突入している。低コストで、広く成果を普及させることができる。そういう時代に紙の本を出版する意味は、権威づけ以外に何かあるのだろうか。「モノ」として価値ある本、「作品」として意味のある本を出版するというのが、1 つの答えだった。その方法として選んだのが、バニヤップの本、2016 年の『妖獣バニヤップの歴史–オーストラリア先住民と白人侵略者のあいだで』（刀水書房）における、画家さんたちとのコラボである。

問題は誰に描いてもらうかだ。最初の一人はすぐに決まった。服部しほりさんである。画廊さんを通じてコンタクトを取り、表紙絵を描いてもらう約束を取り付けた。その後、遠野物語との比較をテーマとして、バニヤップと河童が相撲をとる作品、九十九神（九九節）の理論の部分を象徴する絵もお願いした。後者は私がモデルになったみたいで、少し恥ずかしい気もする。絵は、アカシア、明石焼き、あやかしと掛詞で遊んだ変わった作品である。相撲の絵は、『月刊アートコレクターズ』（2016 年 8 月号）にも掲載された。この他に、爬虫類を得意にする是永麻貴さんに写実的なモハ・モハ（バニヤップの 1 種）を、モノカラーで鳥や魚を描く湊智瑛さんにエミュー・タイプのバニヤップを、ちょっとブラックな洋画家、吉田哲也さんに童話に出てくるバニヤップを依頼した。版画家の鳥彦さんには、バニヤップのイメージにぴったりな作品 mimic の使用許可をいただいた。

最も多くの作品を依頼したのが松平莉奈さんである。変幻自在に絵を描ける人で、しかも上手い。赤い目をしたバニヤップ、先住民ベニロングとクックの合成画、先住民が蘇った先祖だとみなしたイギリス人兵士、ミンカ鳥（悪魔の鳥）、バニヤップ選挙区（風刺画）、本のコンセプトを表す裏表紙の切断されたゴアナ（大きなトカゲ）の作品を依頼した。さらに目次に代わる木次を作るという計画（失敗）の下で、バンクシアの絵も描いてもらった。

2016 年春から雑誌『西洋史学』を刊行する日本西洋史学会の代表となり、就任以前から予定していた改革を順次実施している[17]。2017 年から刊行回数を年 4 回から 2 回に、分量を 4 分の 3 に減らし、6 年間に渡って半年以上遅れていた刊行を正常化した。事務・編集の体制も刷新した。同時に、年 2 回刊行になった第 263 号からはずっと松平さんに表紙絵を担当してもらっている。この年には、第 70 回日本西洋史学会大会が大阪大学で開催されるので、原画を展示するつもりでいる。

2018 年度には阪大西洋史研究室の助教が不在になり、仕方がないので、同年の『パブリック・ヒストリー』の編集を引き受けた。もちろん、三銃士やダルタニアンがいなければ、裸の王様でしかないから、今回は新たに英霊のアーチャーを召喚することにした。学部 3 年生の横田夏樹さんだ。『パブリック・ヒストリー』16 号は、外国語中心の雑誌に仕上げた。さらにアーチャーの力を利用し、InDesign の編集フォーマットの修正も行った。来年度から新たな編集を行なう人びとへの引継ぎを容易にするためである。表紙絵には、新たな画家、2018 年にボローニャ国際絵本原画展に入選、バンクーバー国際ミニプリントビエンナーレ準大賞を受賞した佐藤文音さんの作品を使った。

ここで歴史博物館に回帰する。英霊たちを召喚する能力のあるマスターとして、令呪を

もってしたいことは、12 人の作家さんを選んで、私が撮影した 50 枚の展示品の写真とパラレルな 50 の絵を描いてもらい、オーストラリアの小さな歴史博物館の本を飾ること。それをモノにするか、デジタルにするかは、迷うところだ。InDesign には電子書籍への変換機能がある。

６．デジタル・ヒストリー：パブリック・ミーティング

2016 年に自分自身がサーヴァントとして召喚され、日本西洋史学会大会の責任者となった。「問おう、貴方が私のマスターか」と聞いても、誰も答えてくれないが、召喚されると、世間はデジタル・ヒストリーの時代になっていた [18]。時代の流れに取り残されないように、雑誌『西洋史学』では、遅ればせながらデジタル化も進めた。失われた 10 年がようやく終わり、2017 年度から準備を始めた外国人の先生との共同授業、英語演習の強化、コアカリキュラムの充実、スイスに続いて中国からの研究生を迎え入れなどの改革を 2018 年度に導入した。

これより先 2014 年度にオーストラリア辞典・年表を大学外のサーバーに移行 [19]、石尾さんに新しい検索装置を開発してもらい、2015 年度には久しぶりに辞書の比較的長い項目を追加した。年表も紀元前を入力・表示できるタイプに改良してもらい、幅広く活用できる準備を整えた。

2018 年度、授業もデジタル・ヒストリーに回帰した。回帰というよりも、デジタル・ヒストリーの様々な新しい道具について、知識を持ちたいと思った。演習の学生とともに、そこにはアーチャーもいるが、*Exploring Big Historical Data: The Historian's Macroscope* を読み始めた [20]。正直言って、三銃士やダルタニアンの力で何とかやってきた人間には、学生について行くのが大変だが、この新しい分野の状況を知るには良いテキストだと思った。2019 年度もこれを継続した。TA の森井一真さんの協力も大きかった。

また少し話は戻るが、バニヤップの研究では、伝統的な資料調査に加えて、デジタルデータを本格的に活用した。Google Ngram Viewer を使って、300 くらいのバニヤップ bunyip という単語を使った文献を調べ、包括的な歴史的新聞データベーストローブ Trove（オーストラリアの主要な日刊紙と地方新聞を網羅したオーストラリア国立図書館の新聞データベース）を用いて、1955 年以前の主要新聞と多数の地方新聞を網羅的に調べた [21]。それによるバニヤップのヒット数は、約 14 万件、新聞記事だけでも 6 万件を超えるデータが集まった。1870 年代までは「前面ローラー踏みつぶし作戦」、つまり記事をすべて読んだが、それ以降は、「小型ローラー・アミダばばあ作戦」を実行した [22]。つまりバニップの社会的用法を除いた、怪物や生物としてのバニヤップに言及した記事だけを利用した。

私がオーストラリアに留学していた 30 年以上前に始めた研究に、パブリック・ミーティング（公開集会）の研究がある。シドニーの日刊紙 *the Sydney Morning Herald* の広告欄から、1871 年から 1901 年の間、隔年ですべてのパブリック・ミーティングの広告、約 1800 件を抽出し、ニューサウスウェールズ植民地における世論形成の構造を分析した [23]。私はこれを時代的にも、地域的にも拡大したいと思っていたが、膨大な作業量を前に頓挫していた。IT 技術の登場はこれを可能にしてくれるように思われた。新聞データベース Trove

を用いて、19 世紀から 20 世紀の約 150 年間にわたる全パブリック・ミーティングのデータを抽出し、世論形成のプロセスを歴史的に解明しようと考えた。

その実現のためには、三銃士やダルタニアンを頼るのではなく、多数の使徒を倒せるエヴァンゲリオンを擁する機構と接触する必要があると判断した。2018 年 6 月に、大阪大学データビリティフロンティア機構のビッグデータ共創シンポジウムに参加。エヴァンゲリオン初号機に出動してもらうことに成功した。「オーストラリアにおけるパブリック・ミーティング新聞記事の自然言語処理解析による世論形成過程研究の高度化」こそが、この作戦の名称である。初号機との意思疎通に問題もあり、十分な成果が上がっていないが、「歴史新聞データからのコーパス構築」という論文の共著者になることになり [24]、最初は内容が分からず当惑したが、データを提供し、論文の修正にも協力したので、研究倫理には反していないかと思う。もう少し、初号機に頑張ってもらった後で、零号機、2 号機、3 号機を登場させようと思っている。使徒をすべて撃破すれば、デジタル・ヒストリーは飛躍的な発展を遂げるし、歴史研究の在り方さえ変えられるかもしれない。

このプロジェクトは既存のすでに電子化・記号化されているテキストから、分析のためのコーパスを構築するのではなく、物理的媒体（本、新聞、記録文書）など単にスキャンされただけで、文字起こしなどによって記号化されていないデータを、電子化・記号化し、容易に利用できるようにする。これは広範な分野に転用可能である。さらに時系列データマイニング技術、最先端の SNS マイニング技術を用いることで、高度なデータ処理も可能になる。歴史家は膨大な基礎的作業から解放され、知的遊戯の空間に飛翔できるかもしれない。

おわりに

歴史研究は大きな変革期に入っている。既得権益を守ろうとする保守主義者は、昔ながらの方法に正統性の拠り所を求めるだろう。しかし、たぶんそこには未来はない。新しい技術を積極的に取り入れ、多様性をできるだけ多く抱擁できるような学問が生き残る（権力者に知り合いがいて、多額の資金を引き出せる分野が生き残るのかもしれないが）。デジタル化の進展もあって、学問自体の境界も、学問相互間で、アカデミックな歴史学とパブリックな歴史の間で、融解が始まっている。少なくとも、そうしたなか現在が、歴史学がさらなる沈滞に向かう移行期であってほしくはないというのが私の願いである。退職まで残された 5 年、もう少し私にできることを**楽しく**しようと思う。人はホモルーデンスなのだから。

---

[1] URL: http://www.let.osaka-u.ac.jp/seiyousi/brcast/index.html

[2] URL: http://bun45.sakura.ne.jp/

[3] この時すでに、MP3 を用いた配信を終了し、リアルプレイヤーを用いた配信の実験を準備中であり、これも 12 月中に完了した。

[4] URL: http://www.let.osaka-u.ac.jp/seiyousi/australia-2.html
[5] URL: http://www.let.osaka-u.ac.jp/seiyousi/travel/index.htm
[6] URL: http://www.let.osaka-u.ac.jp/seiyousi/Ghost-Gazetteer/index.htm
[7] 藤川隆男「「パブリック・ヒストリー」とは何か。」『パブリック・ヒストリー』16, 2020 参照。
[8] See, for example, Kelley, Robert, 'Public History: Its Origins, Nature and Prospects', *The Public Historian*, vol. 1, no. 1. 1978, p. 16.
[9] ピーター・ラスレット（川北稔、山本正、指昭博訳）『われら失いし世界—近代イギリス社会史』三嶺書房 、1986。
[10] ジョン・トーピー（藤川隆男監訳)『パスポートの発明—監視・シティズンシップ・国家』法政大学出版会、2008。
[11] URL: http://www.let.osaka-u.ac.jp:80/seiyousi/in English/top.html
[12] 藤川隆男「オーストラリアの「歴史戦争」–新自由主義の代償」、橋本伸也編『紛争化させられる過去—アジアとヨーロッパにおける歴史の政治化』第 4 章、岩波書店、2018 参照。
[13] Ashton, Paul and Paula Hamilton, *History at the Crossroads: Australians and the Past*, Ultimo NSW: Halstead Press, 2010, pp. 8-9; こうした問題に関しては、次のような一連の論文を執筆した：藤川隆男「オーストラリアにおける歴史博物館」『パブリック・ヒストリー』10 号、2013、pp. 15-33; 「オーストラリアにおける歴史博物館の発達とポストモダニティ」『西洋史学』249 号、2013、pp. 1-19; 'House of History: Academic History and History in Society,'『パブリック・ヒストリー』11 号、2014、pp. 106-116; 「オーストラリアにおける地方の歴史博物館の変遷」『待兼山論叢』49 号、2015、pp. 1-25; 「オーストラリアにおける歴史教育の統一的・全国的カリキュラムの導入」『パブリック・ヒストリー』12 号、2015、pp. 15-28; 「パブリック・ヒストリ—社会の歴史意識・知識とアカデミックな歴史」『西洋史学』263 号、2017、pp. 36-48; 藤川隆男「オーストラリアの「歴史戦争」–新自由主義の代償」橋本伸也編『紛争化させられる過去—アジアとヨーロッパにおける歴史の政治化』岩波書店、2018 年, pp. 109-130; 歴史的賠償を扱った翻訳に、ジョン・トーピー（藤川隆男他訳）『歴史的賠償と「記憶」の解剖』法政大学出版局、2013 がある。
[14] *Museums in Australia 1975: Report of the Committee of Inquiry on Museums and National Collections including the Report of the Planning Committee on the Gallery of Aboriginal Australia*, Canberra: Australian Government Publishing Service, 1975, p. 21.
[15] ポストモダニズムの主張者が多いので、「無意識の」と付け加えた方がよい。
[16] Szekeres, Viv, 'Museums and multiculturalism: too vague to understand, too important to ignore' in Des Griffin and Leon Paroissien, eds., *Understanding Museums: Australian museums and museology*, National Museum of Australia, 2011, pp.1-2; Healy, Chris, *From the Ruins of Colonialism: History as Social Memory*, Melbourne: Cambridge University Press, 1996, pp.77-78; Davison, Graeme, *The Use and Abuse of Australian History*, Sydney: Allen & Unwin, 2000, pp. 162-164.
[17] かつては西洋史研究室には助教（助手）が 2 人いて、『西洋史学』の編集を一手に引き受けていたが、大学改革の余波で、まず 1 人に減らされ、ついには助教不在の時期も存在するようになった。また、学生を競争に駆り立てる時代に、大学院生の助力を求めることも容易ではなくなった。雑誌の編集体制を根本的に見直す必要があることは、かなり以前から明らかであったが、問題は放置され、何の対策も講じられていなかった。多くの編集委員にはそれが雑誌の存続に関わる問題だという認識さえなかった。論文を集めて審査していれば、勝手に雑誌ができ上ると勘違いしている人びと（投稿する人も含めて）が多いのは一つの驚きである。雑誌の改革の提案を行った時、「今後、誰がその労力を提供するのか」と問うてみたかったが、それは聞かなかった。改革の提案が通らなければ、編集幹事と編集委員を辞任し、『西洋史学』から完全に手を引こうと決めていた。
[18] ここら辺の言葉を理解してくれた会場の学生には感謝している。
[19] 注２参照。
[20] Graham, Shawn, Ian Milligan and Scott Weingart, *Exploring Big Historical Data: The Historian's Macroscope*, London: Imperial College Press, 2015; see also URL: http://www.themacroscope.org/?page_id=584
[21] URL: https://trove.nla.gov.au/newspaper/?q=
[22] 藤川隆男『妖獣バニヤップの歴史–オーストラリア先住民と白人侵略者のあいだで』刀水書房、2016、223 頁。

[23] Fujikawa Takao, 'Public Meetings in New South Wales: 1871-1901', *Journal of the Royal Australian Historical Society* Vol.76, Part 1; see also Tilly, Charles, 'The Rise of the Public Meeting in Great Britain, 1758-1834, *Social Science History* 34, 3, pp.291-299.

[24] 田中昂志、Chenhui Chu、中島悠太、武村紀子、長原一、藤川隆男「歴史新聞データからのコーパス構築」、言語処理学会第 25 回年次大会、2019。